

挨拶とお辞儀について思うこと

咲夢まりあ

お辞儀と挨拶はコミュニケーションの基本であり、マナー研修では必ずと言うほど最初に行います。面接対策でも第一印象を決める大切な要素であると言われています。

もちろん、ビジネスの場だけではなく、私達はあらゆる場面でお辞儀や挨拶を行います。

芸術の秋よろしく、このところピアノ、バレエ、オペラ、社交ダンスパーティーなどに行く機会が多くなりました。

プロの舞台から生徒さんの発表会までレベルはさまざまですが、さて、「プロとアマチュアの違い」とは何でしょうか。

「プロ」や「先生」の立場の人は、技術や表現力などのレベルが一定以上であることはもちろんですが、アマチュアや生徒さんと決定的に違うのは、「お辞儀と挨拶」ではないかと思うのです。

「登場と退出の仕方」が違うのです。

堂々とした歩き方、余裕のある微笑みと優雅なお辞儀。舞台袖に引込む最後の瞬間まで美しいと感じる時に、「ああ、本物だ」と思うのです。

バレエのコンクールなどで、「登場した瞬間にはば審査が決まる」などとよく聞きますが、上手な人は舞台に1歩踏み出す足の動きから美しいのです。ただ立っているだけで美しいと言えます。

語弊があるかもしれませんが、アマチュアの多くの方は、いかにも自信なさげに登場し、照れくさそうな顔でお辞儀もそこそこにサッと挨拶して、ご愛嬌の笑顔でとにかく一刻も早く去ろうとしている姿がよく見受けられます。

思えば習い事の分野が何であれ、お辞儀や挨拶、入退場の練習というのはわざわざしないのではないのでしょうか。したとしてもそこまで時間はかけないと思われます。

一体、このお辞儀や挨拶はどうすれば上手になるのでしょうか。長年の経験や場慣れで自然

に身に付くものなのでしょうか。

世界の王室の方などが、非常に美しいカーツシー（女性の最上級の挨拶）をされている様子を見ることがありますが、訓練され本当に習慣化していなければあのような優雅な動きはできないでしょう。



プロの方が美しいのは、心を込めてその道に向き合い時間を捧げて取り組む姿勢が、洗練された動きに繋がり、磨き上げられていくからなのだろうか、などと考えています。

心を整え、姿勢を整えて物事に取り組み、「本物」になりたいと思います。

真の美しさは、その人の去り際に表れるように感じます。

『立つ鳥跡を濁さず』という諺もありますが、次に使う人や片付けてくれる人が不快な気持ちにならないように、自分が使った後を綺麗に整えて去りたいものです。

例えば、飲食店、化粧室、待合室、乗り物など公共の場など、特に人が見ていない所での行動が、その人の本質を表すと思います。

念入りにメイクを整え、化粧室を出て行った綺麗な人の使用後が、ゴミを放置していたり、髪の毛がたくさん落ちていたり、洗面台が水浸しだったら・・・その美貌に真の価値があるのでしょうか。

使った椅子を元に戻す、読んだ本をラックに戻す、こぼした水滴を拭いておく・・・

そんなちょっとした行動がさりげなく出来ている人を偶然見かけたとき、とても素敵だなと感じます。

相手に良い印象を与え、自分を美しく見せるための所作やマナーはもちろん大切ですが、人が見えているからそうするのではなく、自身の心からの行動が真の美しさに繋がると信じています。

ルッキズムが批判されることがありますが、単なる外見比較ではなく、その美が真の美しさから輝くものであるのかを見抜く力が必要なのではないでしょうか。